

松陰

Show-in



国士館大学図書館報
第25号
2011年3月1日

メディア社会における 国語教育と図書館と

山室 和也

私の専門である国語教育についてから、話を始めようと思う。国語教育がどのようなことを扱う分野かと問われたら、専門外の方々はどのようなことをイメージされるだろうか。おそらく、それぞれが受けてきた教育の印象から類推して、小学校から高等学校までの国語の授業で教える内容及び方法を扱うという大まかなイメージが作れるのではないか。例えば、教える内容としては、鷗外・漱石・芥川など近現代の文章から、枕草子・源氏物語・奥の細道などの古典作品、漢字を代表とした言語の様々な分野を想起されるだろう。

CONTENTS

- メディア社会における
国語教育と図書館と
- 選書ツアー
- 図書館講演会
- 図書館絵画展
- Library Guidance
- 寄稿
「国会図書館 50 年」
- 図書館から見る
組織変更の必然
- お知らせ
/開館スケジュール

その一方で、平成 20 年度に改訂された学習指導要領において、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設されたり、さらに読解力との関連で、読書活動が強化されたりして、確かに動きも見られる。しかし、これらの変化も、「伝統的な言語文化」と言えば古典の学習であり、読書指導も国語の中でのことで、何ら新しい印象を受けないようにも思われる。つまり、国語という教科は、旧態依然として昔から扱う内容が何ら変わることがないという印象があるのではないかと思うのである。

なぜ、このような話から始めたのか。

実は、「メディア社会」ということが「国語教育」や「図書館」にとって大きな問題となっている。旧態依然として中身が変わらないようなイメージを持たれている国語教育にも大きな影響を与え、そして変わってきているということ、そ



して図書館もそれとよく似た状況にあるのではないかとの問題意識から、まずは自分の専門分野である国語教育のイメージから話を始めたのである。

情報化社会ということは、既に数十年前から言われていることで、何も新しいことではない。しかし、1990 年代以降の技術革新によって、私たちの生活のスタイルが目まぐるしく変わってしまっていることは、普段あまり意識しないが現実的に非常に大きな問題である。一部の世代を除き国民のほとんどが携帯電話を持ち、パソコンでインターネットを使って世界中の情報を手に入れ、人と人との関わりも電子メールやブログ、ツイッターなどのメディアを通して行うことができるようになった。現在の子供たちは、これらの新しいメディアが日常生活の中に当たり前存在している中で生まれ、育って来ている。そうした世代と、それ以前の世代とのメディアに対するとらえ方は、到底同じようには捉えられない。それゆえに、幼児教育から小学校・中学校・高等学校のみならず大学における教育の問題も、これらのメディア社会の革新的な変化を無視できない状況なのである。

国語教育の全国規模の学会では、昨年から『『メディア』から国語教育の研究と実践を展望する』という課題研究が始まった。実際には、1990 年代後半から「メディアリテラシー」と国語科とを関連させた研究や実践が見え始め、2000 年代前半には、例えば井上尚美・中村敦雄『メ

ディアリテラシーを育てる国語の授業』(2001・明治図書)などが世に出され、教育現場へも影響を与え始めている。つまり現実の社会の変化に対応すべく国語科自身の内容についても変革が始まっているのである。先に紹介したこの度の学習指導要領においても「本を中心とした資料から新聞や雑誌、インターネットなど様々なメディア」という記述が小学校高学年対象の解説に出てくる。従来の文字による情報だけではなく、音声・映像によるメディアを学習の対象として受け止めていく必要が出てきたのである。

教育界の動きとしても、ハード面として教科書のデジタル化や黒板の電子化など、加速度的に環境が整備されつつある。しかしその反面、ソフト面としての対応、そして何よりもそれを扱う教師の側のリテラシーには大きな遅れが指摘されている。例えば、学校の各教室や学校図書館にこれらのハード面が設置されたとしても、実際問題としてはそれらを使いこなす人間の存在が必要となる。それが追い付いていかないのである。

図書館に目を向けてみると、電子書籍化の動きもある中で、図書館が今後どのようにメディア社会と付き合っていけばよいのかということが大きな問題となっている。すでに、学術雑誌などは、紙ベースものだけではなく、e-journalとして電子版の積極的な導入が進められている。限られたスペースの中で、今後ますます増える莫

大な書籍群をどのように管理・活用していくのかは、図書館においても大きな課題である。さらに、多様なメディアを使いこなす世代を学生として迎えるこれからの大学図書館は、ますます旧来の書籍だけを扱う施設ではありえない。表面的にインターネットの端末を多く設置して、自学自習の便を図る、学習スペースとしての役割だけでも済まされない。多様なメディアを活用できる情報センターとしての役割、つまり総合情報館としての役割が求められるのである。機を同じくして、本学の図書館も、情報科学センター、情報基盤センターとの統合によって、総合的なメディアを扱う施設に生まれ変わろうとしている。

国語教育に話を戻そう。前に紹介した学会の課題研究において、東京大学の水越伸氏は、国語教育との関わりで「デジタル時代の『生活綴り方』」活動として「あいうえお画文」「デジタル・ストーリーテリング」などの活動を提案し、既に一部の実践的グループではこれらの試みが行われていることなどを紹介していた。図書館がこれらの多様なメディアによる活動にも対応できるようなデジタルコンテンツの充実を図る必要があるのと同じように、国語教育も旧態依然の内容にとどまらず、他分野との関連を図って新たな時代に向かわなければならないだろう。

(やまむろ・かずや

＝初等教育専攻・国語科教育)

2010 国民読書年企画第3弾 第7回選書ツアーを実施しました！

2010年11月6日（土）に本学では、通算7回目となる選書ツアーをジュンク堂書店新宿店にて実施しました。

事前説明会（学生座談会）では、参加者による活発な意見交換があり、選書ツアーに対する思いから、選書内容、さらには図書館への要望等が出ました。短時間でしたが大変密度の濃い会となりました。



ツアー当日、学生バイヤーの皆さんは、広い店内を疲れも見せず、ある人は楽しそうに、またある人は真剣な眼差しで、専攻する分野の専門書をはじめ、各自が興味のある本、他の学生に読ませたい書籍を選書しました。

バイヤーの中には、事前に欲しい本をリストアップした人、blog・twitterなどで友人等から情報を収集した人もいて、学生達のツアーに対する強い気持ちを感じ取ることができました。

●参加学生による当ツアーのアンケート結果は、概ね好評でした。以下はアンケートの抜粋です。

【設問】：次回選書ツアーがありましたら、参加してみたいと思いますか？

参加してみたい	14名	88%
参加したくない	1名	6%
その他	1名	6%
合計	16名	100%

【参加したくない理由】：「今回で（参加が）3回目になり、他の人のためにもこれ以上は遠慮しようと思います。どうもありがとうございました。」

*後輩思いの暖かい言葉を書いてくれましたが、次回も時間が許す範囲で参加して頂きたいと思えます（図書館員 G）。

【その他理由】：「保留です。勉強しないしダメなので。」

*今回、積極的に参加してくれましたので、その積極性を次回ツアーや勉学等へも発揮して頂きたいと考えます（図書館員 G）。

●学生バイヤー選書図書リスト(抜粋)

「杉下右京の事件簿」 碓卯人

「爆笑中古車がみるみる欲しくなる!」 芥川伊藤他

「限りなく透明に近いブルー」 村上龍

「専門医が語るエイズの知識」 吉原なみ子他

「絵で見る十字軍物語」 塩野七生他

★今回の学生バイヤーによる選書図書は、中央図書館 1 階新着図書コーナー横に展示中です。皆様のご利用をお待ちしています。
(第1司書課 郡司博之)

江戸時代の印刷・出版文化

図書館では国民読書年企画第5弾として、印刷博物館の学芸員 緒方宏大 先生をお招きして「江戸時代の印刷・出版文化」と題し、2010年12月16日講演会を開催した。学生をはじめ、教職員にも参加いただき、デジタル化や電子書籍が発行される時代にあえて、江戸時代の印刷・出版文化について講演をしていただいた。

グーテンベルグが発明した活版印刷よりも数十年早く中国や朝鮮で、すでに活版印刷が行われていて、日本もその影響を受け仏教文化とともに発展してきたこと。また徳川家康は活字人間で、後に出版文化が花開くことに少なからぬ影響を与えたと聞き興味深いものがあった。

銅版や木版を削って活字を作った日本の職人の技術の高さとともに、本を作って売するために表紙に工夫をこらし、挿絵などに色をつけたりした芸術的なセンスが伺えた。

電子書籍時代、そのような芸術性は生まれるのだろうか？無味乾燥な端末の文字だけを追って、情報を得るだけとなり、本そのものを楽しむことは今後、なくなってしまうのだろうか？紙媒体による出版文化は衰退してしまうのだろうか？江戸時代の出版ジャンルと現代の出版ジャンルと大差はない。人間が求めるものはいつの世も変わらない。ただ、提供する道具（媒体）だけが変わるようである。

新刊の電子書籍はそれほど読まれていないといわれている。古い資料をデジタル化したもの

が、電子媒体を使って、いつでもどこでも読めるようになったというものが、多く利用されているのだという。今回紹介していただいた、江戸時代の印刷物も原本は、重要文化財として大切に保管されていて安易に手にすることはできない。しかしながらデジタル化されれば、手軽に古活字本を読むことができ、すばらしいことのように思える。

(第1司書課 木下幸子)



2010 国民読書年企画第4弾

図書館絵画展 ～夢をあきらめない～ を開催しました！

2010年12月3日（金）から15日（水）の期間、中央図書館3階グループスタディ室Aにて、鈴木正博さん（本学法学部事務室勤務）制作の絵画展を開催いたしました。多数の方々にご来場頂きまして誠にありがとうございました。

本企画は、学習支援の一環として、学術・芸術活動等の発表の場としての図書館というスタイルをアピールし、図書館の新たな利用方法を広報する一助となればと考えて企画いたしました。本学関係者という身近な存在である鈴木さんが、仕事の余暇を利用して作成され、公募展などで幾度となく入賞・入選された作品を鑑賞することによって、その人物と図書館に対して、来場者が親近感を持っていただければとの一念での個展開催となりました。



来場された方々の感想やアンケートから、鈴木さんの作品と図書館企画展ともども大変良い評価を頂きました。また、鈴木さんと図書館に対する応援メッセージを多数賜りました。今後も図書館で何か企画展を開催して欲しいとの希望もありました。

鈴木正博さんからは、永年の夢であった個展を開くという貴重な機会を頂いた事に、関係者の皆様、また、ご来場頂いた方々に感謝致しますとの謝意を頂戴しました。



芽生えの時

今回展示された鈴木さんの作品群は、絵画（点描画、油絵）から陶芸まで、約30点の多種多様なジャンルのものから形成され、来場者はその独特の芸術スタイルや作者の世界観に圧倒されていた様でした。中でも、最近取り組まれている点描画は、絵画全体が「一つの点」から構成されている精妙な技巧と蝶を中心に描かれた画風から独特の雰囲気醸し出していました。



（第1司書課 郡司博之）

LIBRARY GUIDANCE / を開催しました

平成 22 年 12 月 21 日に国士館大学附属中央図書館（グループスタディ A 室）にて、「一少人数向けガイダンス—あなたらしいレポートを書くためのコツ」を開催いたしました。

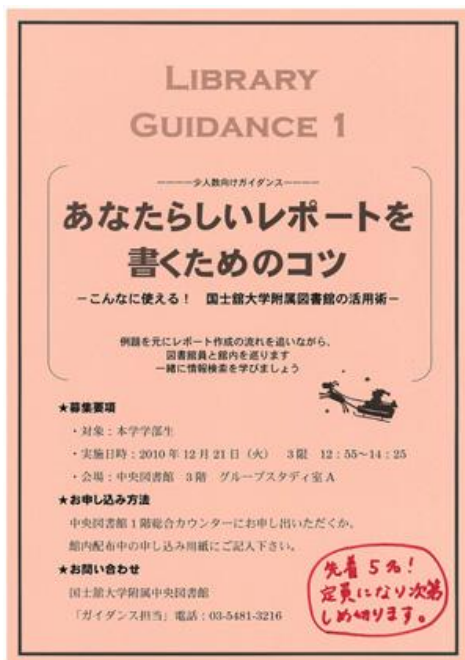
限定 5 名の少人数で、円卓を囲みながら、また館内を巡りながら、レポート作成に役立つ図書館の情報検索方法を学びました。

政経学部 1 年生 1 名、4 年生 1 名、文学部 2 年生 3 名の学生さんが参加して下さいました。少人数ならではの和やかな雰囲気と、積極的に参加される姿勢が印象的でした。

開催後のアンケートでも「わかりやすく、今後の課題作成に役立ちそう」「アットホームな感じが良かった」など、ご好評をいただきました。

ご意見を参考に、今後も利用者のみなさまに役立つガイダンスを企画していく予定です。

日本アスペクトコア株式会社 河原井一紗



当日のプログラム (配布資料より抜粋)

- 手順 1 課題が提示される
- 手順 2 課題図書を手に入れる
- 手順 3 問題文で問われていることを明確化する
- 手順 4 課題図書を読む
- 手順 5 情報検索をする
情報検索ステップ 1
(新聞縮刷版・データベース)
情報検索ステップ 2
雑誌記事検索(「Magazine Plus」)
- 手順 6 書いてみる
- 手順 7 内容を磨く

★… レポートの書き方

オススメ本リスト …★

★… 本日のまとめ …★

例題レポートをとりあげて作成の流れを追いながら情報検索方法を学ぶ、ロールプレイング形式のガイダンスでした!!

国会図書館の50年

1961年11月、国立国会図書館新庁舎、現在の東京本館が開館になりました。今年はその開館50年目を迎えます。

この開館を記念してそれと同日11月1日、切手が発行されました。額面は当時の定形郵便基本料金の10円です。

世は高度成長の真っ直中、ランドマーク建設や開拓が目白押しの時代でした。

1950年代に早くも始まった切手収集ブームに乗って、これらのエポックは次々記念切手となります。国会図書館開館も例外ではなくその対象となって、その発行枚数は800万枚を数えその一端を支えました。

国会図書館HPの「小史」によると明治5年設立の「書籍館」をそのルーツとしています。更に明治39年帝国図書館開館 昭和23年国会図書館開館と節目の年があります。

1961年の後も国会図書館は収蔵冊数の増加とニーズの多様化を見据え、1986年に新館、2000年支部上野図書館を改築した国際子ども図書館、2002年京都に関西館と施設の拡充が続きました。

しかしこれらの内、切手が発行されたのはこの時と2000年の国際子ども図書館開館の2度だけです。国の図書館に対する考え方が反映された結果ともいえるかもしれません。

今日ランドマーク建設などを単純に記念する時代は過ぎ、そしてまた収集ブームも去ってしまいました。その結果、記念切手の発行は内容、枚数などかつてなく大きく変わることになります。

国際子ども図書館開館記念の切手は「子どもの本の日」制定とコラボだったこともあり「建物」が図案化されることはありませんでした。

(笹岡文雄)



図書館から見る組織改編の必然

2011.02.23 図書館事務部長 植田英範

附属図書館が、情報科学センター及び情報基盤センターと機能統合し、「情報メディアセンター（図書館）」（案）への組織改編の動きが、平成23年度後期の移行に向け舵切られた。

図書館の整備コンセプトである「統合学習環境」から見た場合、そのICT基盤が強化されることは喜ばしい。コンソーシアム及び世界中の協定大学や協力機関との学術情報共有など、教育研究にグローバルなサービス展開が可能になる。本年度の卒業生から、在学中取り溜めた学習参考資料等が本学に生涯保存できる。また、同時に在校時のメールアドレスの生涯利用が担保されたことは、本人と大学双方にとってメリットが大きい。

クラウド化は、ICT基盤構築の従来型デザインポリシーの崩壊を意味する。誰も経験したことのないICT環境を、過去の経験則からと未来の可能性から見ているせいで、検討の過程からたびたび議論が噛み合わない。だが、本質は既にICT環境を取り巻く組織が破綻していることにあった。現状では、高度の専門性が求められる図書館、情報科学センター、情報基盤センターに、その適材人事配備が保証できていない。したがって、ICT基盤そのものも脆弱になり、サービスの劣化によって業務や教育研究の至る所で問題が噴出し始める。年間10億円弱のICT関連予算のコストパフォーマンスの低劣は、だれの目にも明らかである。これを組織統合だけで打開しようとしても無理である。ICT基盤のクラウド化、すなわち「持つ」から「利用する」いう先進マネジメント・技術転換の必然がここにある。ユーザニーズであるシステム構築やプログラム開発という必要性に柔軟に対応できるから、実現までの時間を小さくし、機関等の政策課題の時代的対応が円滑になる。

学術リポジトリ「kiss」は、利用度はOPACに劣らないが収蔵件数は1万件にも満たない。他大学等との情報共有は必至だった。しかし、ICT経費が大きいのでDspaceなどオープンソースに走りがちだった。これも余り魅力的ではないので導入が順調とは言えない。「kiss」は、クラウド化で運用経費が約3分の1になる。つまり、ほとんどの大学図書館が導入している図書館システム及びOPACもクラウド化されれば、学術リポジトリと両方で現行経費よりも少なくなる。必要なら学部や研究所がサブジェクトリポジトリ「kiss」を持つことさえ可能である。

今般、バージョンアップ「kiss」のみではなくこの図書館システムもフルクラウド化開発に踏み切った。秋季から本格稼働する。無論投資額の回収策も折り込み済みである。図書館が何を大切にしているのか、また何を達成したいのかについて、関係方々のご寛容に心から感謝申し上げたい。



お知らせ

■ 春季休暇期間中の貸出し

◇受付期間:学部生 平成 23 年 1 月 24 日(月)～3 月 25 日(金)
大学院生 平成 23 年 1 月 24 日(月)～3 月 8(火)

◇返却期限:平成 23 年 4 月 9 日(土)

※ただし、卒業・修了年度者は、平成 23 年 2 月 26 日(土)とします。

◇貸出冊数:学部生 10 冊(ただし卒業年度者は 5 冊)
大学院生 20 冊(ただし卒業年度者は 10 冊)



開館スケジュール (2～3月)

中央: 2 月 1 日(火)～3日(木) 入試のため休館
2 月 4 日(金) 9:00～17:00開館
3 月 2 日(水)～3月3日(木)入試のため休館
3 月 16 日(水)～3 月 19 日(土) 特別清掃のため休館
※3 月中の開館時間は9:00～17:00に変更になります。

鶴川: 2 月 1 日(火)～2月5日(土) 蔵書点検のため休館
3 月 2 日(水) 入試のため休館
3 月 17 日(木)～3 月 19 日(土) 特別清掃のため休館

多摩: 2 月 1 日(火)～2 月 5 日(土) 入試のため休館
3 月 2 日(水)～3 月 3 日(木) 入試のため休館

※変更になる場合がございますので最新の情報は図書館ホームページをご確認ください。

編集後記

2011 年。今年も「松陰」よろしくお願ひ致します。とは言いつつ、すでに3月。学生たちも春休みに入り、キャンパスも静かになりました。

図書館では様々な催しを企画し、今号にもいくつか掲載しています。

これからもいろいろな企画を通して、また、読みたいと思っただけの本を揃えて図書館員一同皆様をお待ちしております。(Y.S)